

地域に暮らす障がい児（者）への発達支援

— クッキング体験の企画運営を通じた学生の体験と自己効力感 —

白幡 亜希・小塚美由記・鹿内あずさ

抄録：北海道文教大学スマイル・プロジェクトの活動の更なる活性化，及び，学生の専門分野の学習意欲と専門職を目指す意欲の向上等を支援することを目的に，同プログラムで2年連続開催したクリスマス会のプログラムに主体的に参加した健康栄養学科の学生たちと，地域に暮らす障がい児（以下，対象児），及び，複数学科の学生との学問的交流を通して，健康栄養学科の学生たちが得た自己効力感や学び経験について分析した．同プログラム参加した学生は，通常の座学授業では学ぶことのできない体験の中から，対象児（者）へ必要な情報を伝える上での専門分野の基礎学習の重要性を再認識出来ている上，対象児（者）に対するポジティブなイメージを持つとともに，対象児（者）に対する接し方や方法など他学科の学生とともに協力することで，他職種連携の重要性に関して気づき，自己効力感を得る結果となった．

キーワード：障がい児（者），管理栄養士，専門性，自己効力感

1. はじめに

管理栄養士は、「食」を扱う職業であり，様々な方を対象とする．その中には，障がいによりその人らしい生活を送ることが困難となった人も含まれる．しかしながら，管理栄養士養成課程において，障がいをもった児（者）を対象とした学習や，実習などがほぼないのが現状である．

本学では，2017年より大学が位置する恵庭市を中心に，疾患や障がいを持ちながら在宅で療養・生活している児童・生徒（以下，在宅療養児）との関わりを通し，その「もてる力」を育み，高めることを目的とする医療系・教育系5学科連携での北海道文教大学スマイル・プロジェクトを実践している．今回は，当該プロジェクトにおける取り組みの実施について報告する．

2. 目的

2018年12月及び2019年12月に実施したクリスマス会のプログラムに主体的に参加した学生たちの対象児及び保護者との関わり，及び，複数学科の学生の学問的交流を通して得られた専門分野の基礎学習の重要性の再認識や，専門職を目指す意欲を高めるきっかけ等について，今後のプロジェクト活動の更なる活性化と，学生の専門分野の学習意欲と専門職を目指す意欲の向上等の支援に活かすことを目的に検討，分析を行った．クリスマス会のプログラムと参加した健康栄養学科学生の体験と学びについて報告する．なお，自己効力感については，Bandura, Aの「ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるかという個人の確信」と同様に用いる．

3. 方法

3.1 2018年12月

恵庭市発達支援センターと北海道文教大学スマイル・プロジェクト共同企画として第1回クリスマス会を企画・開催した。対象者は恵庭市発達支援センターのデイサービスに通所している中高生14名（男子11名・女子3名）であり、プロジェクトメンバーである健康栄養学科，こども発達学科，作業療法学科の学生が実施内容を検討した。検討の結果，全体プログラムはクッキング体験とスノードーム作りとなり，健康栄養学科の学生が主体となるプログラムは，クッキング体験となった。持ち時間が50分と短時間であったため，簡単に作れて，かつ楽しめるものをテーマに調理内容を検討し，クリスマスカップケーキ作りに決定した。健康栄養学科から2年生2名，3年生3名，4年生2名，作業療法学科から2年生2名，計9名が参加した。事前準備では，参加する生徒の身体状況や障がいの程度などを学生間で相談し，「使用器具の適正」や「作業工程」を検討しながら試作を行った。当日は，参加者と学生・支援センターの方とでペアになり，参加者一人ずつ，複数個のカップケーキを作成した。生地を焼いた後，チョコペンやホイップクリーム等を用いてカップケーキにデコレーションを行った。作ったカップケーキはその場で数個喫食し，残りは家族へのお土産とした。事故や怪我もなく予定通り終了することができた。



図1 試作の様子



図2 カップケーキ作りの様子



図3 デコレーションの様子



図4 集合写真

3.2 2019年12月

恵庭市発達支援センターと北海道文教大学スマイル・プロジェクト共同企画として第2回クリスマス会を企画・開催した。対象者は，恵庭市発達支援センターのデイサービスに通所している中高生8名であり，プロジェクトメンバーである健康栄養学科，看護学科，こども発達学科，作業療法学科の

学生が実施内容を検討した。検討の結果、全体プログラムはクッキング体験とクリスマスカード作りとなった。ただし、調理内容の検討は、昨年度より発展させ、参加した学生全員が協力して行うこととした。持ち時間は、昨年度と同様 50 分の設定のため、簡単に作れて、かつ楽しめるものをテーマに調理内容を検討し、クルリンパンケーキ（たこ焼き機を用いたパンケーキ）作りに決定した。健康栄養学科から 3 年生 3 名、看護学科から 1 年生 4 名、こども発達学科から 4 年生 2 名、3 年生 2 名、2 年生 1 名、1 年生 1 名、作業療法学科から 4 年生 1 名、3 年生 1 名、1 年生 1 名の計 16 名が参加した。事前準備では、参加する生徒の身体状況や障がいの程度などを学生間で相談し、「使用器具の適正」や「作業工程」を検討しながら試作を行った。また、たこ焼き器を使用したパンケーキのため、中に入れる具材の検討を行った。更に、今回のクッキング体験では、新たに健康栄養学科の学生を主体として「衛生管理」の要素を加えることを計画した。当初は調理を行う際の運営側（学生）の衛生管理についてのみ実施することを検討したが、複数回の検討と修正を重ね、結果として、計画目標を大幅に超えて、運営側・参加者側両方が使用可能なマニュアルを完成し、実施するに至った。当日は、参加者と学生でホットプレート（たこ焼き器）毎にグループになり、クルリンパンケーキを作成した。栗、チョコレート、チーズ、ソーセージなどを具材とし、チョコソースやチョコスプレーでトッピングをした。事故や怪我もなく予定通り終了することができた。



図 5 打ち合わせの様子



図 6 実施の様子

3.3 振り返り

対象児の障がい（発達障がい）の状態を事前に把握し、身体状況に加えて、対象児それぞれの好みや特徴を踏まえて、学生が 2 名 1 組となり、プログラムを体験するためのシミュレーションを行なうなどの準備を経て、当日のプログラムを実施した。

プログラム終了後、学生が自記式質問紙により、プログラムについての振り返りを行った。内容は、所属・年次、参加した活動内容、主に関わった対象児の身体機能・障害の状態、に加えて、1) 関わりの中での工夫・意識した点、2) 困難だった点、3) 対象児に今後どうなってもらいたいのか、4) 対象児（者）の強み・長所について、5) 関わりの前後での自身の変化、6) 全般的な感想の 6 項目である。分析は、収集したアンケートを単純集計・分析のほか、自由記述についての分析も行った。本研究は、北海道文教大学の倫理審査委員会の承認を受けて実施、更に、参加学生には研究の趣旨を理解した上で、書面にて同意を得るかたちをとった。

4. 結果

自記式質問紙によるプログラムについての振り返りの結果である。

1) 関わりの中で工夫・意識した点では、「実際に先生の対応をみて、1人1人が持っている個性や、感性を受け入れ、よく褒めることを心掛けた」「相手の気持ちに寄り添い、特性に合わせて接し方を工夫した」「なるべく目線を合わせて（同じ目線になるように）話を聞くようにした」「サポートのしすぎに気を付けた」という回答を得られた。

2) 困難だった点では、「どの子でもわかりやすいように説明することが難しかった」、「接し方がわからず、話しかけるのに時間がかかった」、「声をかけるタイミングや、声のかけ方が難しかった」「相手の障がいの程度の把握が難しかった」という回答を得られた。

3) 対象児に今後どうなってもらいたいかでは「個性を生かして自分らしく生きていってほしい」、「自分の障がいとその子の弱みになるのではなく、一つの強い個性としてとらえ、今のまま、明るく、自分自身をしっかりと持った大人になってもらいたい」、「今回の調理体験をもとに料理することの楽しさを知ってもらい、自分だけの世界ではなく、みんなと協力したりして、たくさんのことを体験していってほしい」という回答を得られた。

4) 対象児の強み・長所では「g（グラム）や分量、計ることなど、細かな部分を正確に、かつ丁寧に作業するところ」、「何事も一生懸命に取り組んでいるところ」、「何事も楽しそうに、そして場を明るくする力がある」、「人を元気づける大きな力がある」という回答を得られた。

5) 関わりの前後での自身の変化では「発達障がい児に対するイメージが変わった（明るく、何事にも積極的）」、「他学科の学生とかかわり、意見を交流することで、視野が広がり、柔軟に物事を考えられるようになった」、「さらに知りたいことが増えた」、「相手の目線に立って考えることが必要と感じた」という回答を得られた。

6) 全般的な感想では「学生主体で準備・運営する良い経験ができ、他学科の学生と関われる良い機会となった」、「発達障がい児への対応を学ぶだけではなく、子供たちの個性や感性に触れる貴重な機会となった」、「先生や他学科の学生の対象者への話し方や関わり方を近くで見ることや触れることができ良い経験になった」、「障がいに対する考え方も前向きになり、これからもっとたくさん活動に参加することで適切な対応方法や対話方法などを学んでいきたいと感じた」、「他職種連携の大変さや学ぶことの多さを就職前に体感できたので良かった」、「自分の所属する学科でしかわからないことなどもあって、他学科と協力しなければクリスマス会は成功できなかった」という回答を得られた。

5. 考察

今回、プログラムに参加した健康栄養学科の学生は、実際に対象児（者）とともに複数の体験を行い、通常の座学の授業では学ぶことのできない経験を通して、プログラムの中で対象児（者）へ必要となる情報を伝える上での専門分野の基礎学習の重要性を再認識出来ている上、対象児（者）に対するスティグマや偏見のないポジティブなイメージ（隈本 他, 2013）が持てるようになってきている。先にも述べたとおり、管理栄養士養成課程においては、障がい児（者）を対象とした学習や、実習などがほぼないのが現状であるが、当該プロジェクト等への参加経験を通して、将来接する可能性のある対象者への理解に繋がっており、今後の自身の進路を考える上での選択肢の幅を広げる結果を得たと言える。また、初めて関わる対象児（者）とのコミュニケーションの課題を、こどもと関わる機会の多

い他学科の学生を参考にできたことなど、他学科と関わることからの学びも大きかった。加えて、様々な条件を踏まえて、クッキング体験の内容や進め方の検討など企画運営をしたことは栄養教育を目指す学生においては、今後に繋がる非常に良い経験となるとともに、他学科の学生との協力を通して、他職種連携の大切さに関しても学ぶことが出来た。

管理栄養士をはじめとする医療従事者は、一人一人の患者や対象者が、その人らしい生活を送るために、互いの専門性を活かしながら、協力して患者や対象者と関わっていくことが求められる（真鍋他，2015）。今回の経験を通してその重要性に気づき、自己効力感（Bandura, A.1977）を得る結果となったと考えられる。

文献

Bandura, A. : Self-Efficacy The Exercise of Control, New York, W.H. Freeman, 1977.

隈元晴子・常盤野晴子・細谷恵佑：管理栄養士を志す大学生の精神障害者に対する社会的態度の変容
— 専門知識を活かしたボランティア活動の効果 —. 藤女子大学 QOL 研究所紀要, 8 (1) : 43-49,
2013

真鍋芳江・山本由理・森恵子：広汎性発達障害青年を対象とした料理教室に関わった学生の変容. 中国学園紀要, 14 : 101-106, 2015

Developmental Support for Children with Disabilities Living in the Community: Student Experiences and Self-Efficacy Through Planning and Management of Cooking Experience

SHIRAHATA Aki, KOZUKA Miyuki and SHIKANAI Azusa

Abstract: In this study, we analyzed the self-efficacy and learning experiences of the students of the Department of Health and Nutrition, who participated in the Christmas party program for the second consecutive year, and the children with disabilities living in the community (hereinafter referred to as "the target children"), and the students of several departments, in order to support the activities of the Hokkaido Bunkyo University Smile Project and to improve the students' motivation to learn and become professionals in their fields. The students who participated in the program were able to reaffirm the importance of learning the basics of their specialized fields in order to provide necessary information to the target children (hereinafter referred to as "target children") through experiences that cannot be learned in regular classroom classes. In addition, they have a positive image of the target children (persons), and by cooperating with students from other departments, they became aware of the importance of cooperation with other professions and gained a sense of self-efficacy.

Keywords: children (persons) with disabilities, registered dietitians, expertise, self-efficacy